メッセージアウトライン
サムエル記第一22:1～23

「主がともにおられるダビデ」

[1]「ダビデはそこを去って、アドラムの洞穴に避難した。彼の兄弟たちや父の家の者はみな、これを聞いてダビデのところに下って来た」
ダビデはサウル王の追跡から逃れて、一時はイスラエルの敵であるペリシテ人でガテの王アキシュのもとに身を寄せようとした。しかし、彼は捕えられて、いのちの危険に陥る。しかし、彼は狂人のまねをして、からくもそこから逃れた。この時もはかり知れない主なる神の守りがあったのである。「アドラム」…ベツレヘムから南西に約15キロメートルの地。そこには身を隠すにちょうど良い洞穴があった。彼は羊飼いであったから、その近辺の地を知り尽くしていたのであろう。ダビデが命を狙われて、サウルのもとから逃亡していることを知って、彼の兄弟たちや父の家の者たちはみな彼のところに下って来た。これはサウル王の殺意がダビデ家全体に及ぶのを恐れてのことである。
[2]「そして、困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところに集まって来たので、ダビデは彼らの長となった。約四百人の者が彼とともにいるようになった」
ダビデの親族だけでなく、多くの不満分子も集まって来た。その数は約四百人にもなり、彼らはダビデと行動をともにするようになり、彼は彼らの長となった。
[3-4]「ダビデはそこからモアブのミツパに行き、モアブの王に言った。『神が私にどのようなことをされるか分かるまで、どうか、父と母をあなたがたと一緒に住まわせてください。』ダビデは両親をモアブの王の前に連れて来た。彼らは、ダビデが要害にいる間、王のもとに住んだ」
「ミツパ」…山頂とか塔を意味するため、各地に多くの同じ地名があった。ここで言われているミツパは死海の東側のモアブ人の地にあった。
ダビデの曾祖母ルツはモアブ出身の女性であり、ベツレヘムでイスラエルのユダ族のボアズと結婚した。→ルツ記4:18~22　その関係もあり、ダビデは父と母をモアブの王のもとに避難させようとしたのであろう。「神が私にどのようなことをされるか分かるまで」…ダビデの主なる神への信仰を示すとともに、今後、長く続くかもしれない逃亡生活を予測させることばである。その後、彼はアドラムの洞穴に戻った。
[5]「預言者ガドはダビデに言った。『この要害にとどまっていないで、さあ、ユダの地に帰りなさい。』それで、ダビデはそこを出て、ハレテの森へやって来た」
「預言者ガド」…預言者サムエルが監督をしていた預言者集団の一人かもしれない。→19:20

アドラムもユダ部族に属する地であるが、ペリシテ人の支配圏に近いので、そこにとどまっていないで、そこから出よとの勧告かもしれない。「ハレテの森」…場所不明。しかし、サウルの部下たちの目に留まるような場所であったと思われる。
[6]「サウルは、ダビデおよび彼とともにいる者たちが見つかったことを聞いた。サウルはギブアにある高台のタマリスクの木の下で、槍を手にして座っていた。彼の家来たちはみな、彼のそばに立っていた」
　これは作戦会議の様子である。場所はサウルの居住しているギブアにある高台。「タマリスクの木」…ぎょりゅうの木　高いものは18メートルほどにもなる。ピンクや白い花が穂状に密集して咲く。乾燥に強い。
[7-8]「サウルは、そばに立っている家来たちに言った。『聞け、ベニヤミン人。エッサイの子が、お前たち全員に畑やぶどう畑をくれたり、おまえたち全員を千人隊の長、百人隊の長にしたりするだろうか。それなのに、おまえたちはみな私に謀反を企てている。息子がエッサイの子と契約を結んでも、だれも私の耳に入れない。おまえたちのだれも、私のことを思って心を痛めることをせず、今日のように、息子が私のしもべを私に逆らわせて、待ち伏せさせても、私の耳に入れない。』」
「ベニヤミン人」…サウルの出身部族でサウル軍の中核をなしていた。「息子」…ヨナタン。
　ここでサウルは、部下であるベニヤミン人に、ユダ部族のエッサイの子ダビデが王座についても何の得もないと教える。そして、おまえたちは私に対して謀反を企てていると決めつける。その内容は①息子ヨナタンがダビデと契約を結んだことを誰も彼の耳に入れない。②だれもサウルのことを思って心を痛めない。③息子ヨナタンがダビデをサウルに逆らわせて待ち伏せさせていることも知らせない。「待ち伏せさせている」とは王位を狙わせているという意味。
[9-10]「サウルの家来たちのそばに立っていたエドム人ドエグが答えて言った。『私は、エッサイの子が、ノブのアヒトブの子アヒメレクのところに来たのを見ました。アヒメレクは彼のために主に伺って、彼に食料を与え、ペリシテ人ゴリヤテの剣も与えました。』」
　サウルの家来たちは沈黙している。実際、今までダビデについて何の情報も得られなかったのだから何もサウルに伝えることはできないのである。しかし、そこにエドム人ドエグがいた。彼はサウルの牧者たちの長であった。→21:7　彼はダビデが祭司アヒメレクのところに主のみこころを伺いに来て、その時に食料もゴリヤテの剣も渡したことをサウルに教えた。
それを聞いたサウルの矛先はアヒメレクに向かう。
[11-13]「王は人を遣わして、祭司アヒトブの子アヒメレクと、彼の父の家の者全員、すなわち、ノブにいる祭司たちを呼び寄せた。彼らはみな、王のところに来た。サウルは言った。『聞け。アヒトブの子よ。』彼は答えた。『はい、王様。ここにおります。』

サウルは彼に言った。『おまえとエッサイの子は、なぜ私に謀反を企てるのか。おまえは彼にパンと剣を与え、彼のために神に伺い、そうして彼は今日のように私に逆らって待ち伏せしている。』」

サウルは息子ヨナタンがダビデに謀反を企たせていると思っていたが、ここに来て、祭司アヒメレクこそ、その張本人で黒幕だと決めつけた。

[14-15]「アヒメレクは王に答えて言った。『あなたの家来の中に、ダビデほど忠実な者が、だれかいるでしょうか。ダビデは王の婿であり、あなたの護衛兵の長であり、あなたの家で重んじられているではありませんか。私が彼のために神に伺うのは、今日に始まったことでしょうか。決して、そんなことはありません。王様。このしもべや、父の家の者全員に汚名を着せないでください。あなたのしもべは、この事件について、いっさい知らないのですから。』」

ここでアヒメレクはサウルに弁明する。①サウルの家来の中でダビデほど忠実な者はいない。②ダビデは王の婿であり、護衛兵の長であり、サウルの家で重んじられている。③ダビデのために神に伺うのは今日に始まったことではない。④自分や、父の家の者全員に反逆者としての汚名を着せないでほしい。⑤この事件、すなわちアヒメレクがダビデと結託して王に謀反を企てているというようなことについてはいっさい知らない。

[16] しかし、アヒメレクがこの謀反の黒幕と思い込んだサウルはもはや聞く耳を持っていなかった。「王は言った。『アヒメレク、おまえは必ず死ななければならない。おまえも、おまえの父の家の者全員もだ。』」

[17]「王は、そばに立っていた近衛兵たちに言った。『近寄って、主の祭司たちを殺せ。彼らはダビデにくみし、ダビデが逃げているのを知りながら、それを私の耳に入れなかったからだ。』しかし王の家来たちは、主の祭司たちに手を下して討ちかかろうとはしなかった」

祭司たちを殺すことは、その祭司たちを立てた主ご自身に反逆することになる。そしてそれは主の怒りとさばきを招くことになる。それゆえ、サウルの家来たちは躊躇し、祭司たちに手を下そうとはしなかったのであろう。

[18-19]「王はドエグに言った。『おまえが行って祭司たちに討ちかかれ。』そこでエドム人ドエグが行って、祭司たちに討ちかかった。その日彼は、亜麻布のエポデを着ていた人を八十五人殺した。彼は祭司の町ノブを、男も女も、幼子も乳飲み子も、剣の刃で討った。牛もろばも羊も、剣の刃で」

「亜麻布のエポデ」とは大祭司以外の祭司が着る祭服である。そしてそれを着ている者はドエグにとって目印となる。 ドエグはイスラエルの主なる神を恐れることよりも、サウルの命令に従い、祭司たちの大量殺戮を実行する者となった。しかし、これは彼一人ではなく、その部下も加わって行ったことであろう。そしてその殺害の手は祭司の町ノブにまでおよび、そこに住む人間から家畜に至るまですべて殺害

したのであった。疑念と妄想と被害者意識に取り付かれた一人の王のために、大虐殺が起こり、かくも多くの犠牲者が出たのであった。恐ろしいことである。
[20-21]「アヒトブの子アヒメレクの息子エブヤタルという名の人が、一人逃れてダビデのところに逃げて来た。エブヤタルはダビデに、サウルが主の祭司たちを殺したことを告げた」
　エブヤタルは主の宮の番をする者としてノブに残っていたのであろう。そしてサウルのもとに行った父アヒメレクや一族の者全員が帰って来ず、さらにドエグとその部下が剣や槍を持ち、恐ろしい形相で迫って来るのを見て、彼はすべてを悟り、その場から逃げ出したのであろう。そしてダビデのもとに逃げて来て、一切を彼に告げたのである。
[22-23]「ダビデはエブヤタルに言った。『私はあの日、エドム人ドエグがあそこにいたので、彼がきっとサウルに知らせると思っていた。私が、あなたの父の家の者全員の死を引き起こしたのだ。私と一緒にいなさい。恐れることはない。私のいのちを狙う者は、あなたのいのちを狙う。しかし私と一緒にいれば、あなたは安全だ。』」
　「あの日」とはダビデが主のみこころを伺いに来て、アヒメレクからパンとゴリヤテの剣をもらった日のこと。→21:1~9　ダビデはこの大虐殺を自分が引き起こしたのだと告白する。彼がこの時作った詩が詩篇52篇である。　しかし、これはまたアヒメレクの先祖エリに対して預言されていたことであった。→2:22~36　祭司エリは主よりも自分の息子たちを重んじ、息子たちは主の定めを守らず、罪深い行いに走っていた。その結果としての主のさばきがダビデの時代に起こったのである。
　ダビデはアヒメレクに「私と一緒にいれば、あなたは安全だ」と言った。彼はサウルから逃亡中で、いつ自分のいのちが取られるかもしれない状況で、なぜそのように言い切れるのか。単なる強がりか。そうではない。サウルはイスラエルの王として立てられ、最初は謙遜に王政を始めたが、いつの間にか不信仰と傲慢に陥り、主の霊は彼から離れ去り、、主からのわざわいの霊が彼を怯えさせるようになった。→16:14　主は彼の代わりに羊飼いであったダビデを選び、サムエルによって油を注がれたのであった。→16:13　それ以来、主なる神は彼とともにおられ、ペリシテ人との戦いや巨人ゴリヤテとの戦いに勝利し、またガテの王アキシュのもとに逃げた時も主は彼とともにおられ、殺されることなく、守られたのであった。そして今も逃亡中であるが、彼はいつも主が自分と共におられることを信じ、主により頼みつつ歩んでいる。それゆえ彼は、私と一緒にいれば、あなたは安全だと言い切れるのである。主なる神を信じ、より頼む者の幸いはここにある。
　私たちはここから何を学ぶことができるか。主はダビデとともにいてくださる。そして、これはただダビデ一人ではなく、いつの時代でも主を信じ、主により頼む者にも同様な守りと導きをいただくことができるのである。→ローマ15:4　主なる神は私たちを愛し、ひとり子主イエス・キリストを人としてこの世に送り、主は私たちの罪の

身代わりに十字架にかかって死なれ、私たちの罪を贖ってくださった。本来は私たち罪ある人間が神にさばかれ滅びに行かなければならない存在なのである。このイエス・キリストを自分の救い主と信じ、より頼む者として、私たちもこの地上の生涯を歩んで行かなければならない。そこに主の守りがあり、確かな導きがある。ヨハネ3:16、ローマ3:23~24、マタイ28:20